

西南戦争血涙史を出版して

北 村 清 士

※適正評価の歴史観に立ちて

今春の新年号の諸雑誌記事をとりあげて、評論家の木村毅氏は「逆襲してきた明治時代」と題して、明治時代の取材や出版企画の多きに一驚された論評をかかげられた。即ち明治がホコをさかさまにして逆襲してきたような感がすると述べている。ところで明治時代の文明開花にはいろいろの問題点をはらんでいるが、兎も角あの飛躍的な創造と発展のすばらしさは、「明治ブーム」の今日の要因をなすもので、大人はもとより学生や根性ある青年たちも、また特別の観点から「明治への」興味をかき立てている。これは反動とか、フアッシュヨ化への復帰でなく、木村氏にしたがえば史学的科学性の根強い要求の上に立つものと論断している。したがって、私は「明治時代の再評価」は別として、明治時代の象徴的大事件であった、西南戦争に対しても、新たな史観からこの際眺めることも、あながちムダな情熱ではないかも知れないと思ひ、さまざまの角度から照明をあてることとした。

※近代国家への脱皮のきつかけ

思うに西南戦争は明治時代において、国内戦の最大悲劇といえようそれは同郷の人、肉身の兄弟、年来の知己、師弟同士がそれぞれの立

場に立たされ、思いもよらぬ敵と味方に分かれ、九カ月間の死闘をくりひろげたのであった。文字どおり悲劇中の悲劇として目を蔽うに余りがある。しかし、この血をもつて洗うような悲劇は、歴史的な大きな視野に立って静観すれば、日本が封建的のカラを破って、近代国家に脱皮した重大な転機であったのである。失業的立場におかれた不平不満の士族も時の流れには抗しがたく、新たな農民を中軸とした徴兵制度も脚光を浴びて、明治政府の中央集権の基礎をきづき、欧米文化の誘引によって諸外国へ中間入りする戦いで意義深い好機会であった

※戦争の実態を見直そう

さて、従来の西南戦争史は西郷軍に対して、夢中になって鞭を加えていた。勿論、反政府的の行動が絶対に許さるべきではない。しかし明治新政に当っては封建制度崩壊の直後であり、内政的に解決すべき問題が山積していた。

この戦争の起こった以前の全国各地の反乱を見てもよく分かることである。ところがこの戦争が官軍の勝利によって、各地の不平分子も息の根を止むるに至った。西欧に遠ざかった日本が、この戦で国民統一を達成したことは、たいへんな幸運であった。これがやがて日本の近代化のための出発点となり、自由民権論の発展に役立つことになった。とすればこの戦争で戦死された人々も、笑って成仏するのではなからうか。言いかゆれば日本が近代国家化への尊い犠牲であったのである。もしもこの拙著がそうした史観から「明治時代へ」の郷愁の一助ともなり、戦争の意義を適正評価すること得れば、望外の幸であると思うのである。